ものを十二指腸より3個，空腸より5個摘出し，胆嚢摘出術を施行した。多発例は稀で，術前診断し得た点でも貴重な1例である。

57. 内臓逆位症を伴う肝細胞癌の1治験例

二宮栄一郎，小澤弘侑，鈴木昭一
飯野　正敏，木村正幸，山田英夫
（沼津市立）
竜　崇正　（千葉県がんセンター）

症例は，58歳，女性。主訴は体重減少，全身倦怠感。精査にて，胸腹部内臓逆位を伴う，肝内側区域を中心とした肝細胞癌と診断。昭和63年12月12日，左三区域切除を施行した。内臓逆位症は稀な全身性奇形で，その頻度は2,000～4,000人に1人である。肝細胞癌との合併は自験例を含め本邦報告5例であり，外科的切除例は3例であった。

58. 家族性大腸ポリポーシスの切除例

長谷川正行，野村庸一，長島　通
（公立長生）

症例は36歳，男性。主訴は下痢・下血。父親が52歳で直腸癌にて死亡。注腸・大腸内視鏡検査にて，直腸および全結腸に多数の大小不同のポリープを認めた。胃・小腸にポリープは認められなかった。昭和63年8月9日，全結腸切除，直腸粘膜切除，W型回腸嚢肛門吻合術を施行した。組織像は tubular adenoma であり，癌の合併を認めなかった。現在，排便回数はオピウムを用いて3～4回と安定している。若干の文献的考察を加えて報告した。

59. 大腸，胃，胆嚢同時性三重複癌の1治験例

原田　昇，佐藤裕俊，渡辺義二
入江氏康，丸山尚嗣
（船橋市立医療センター）

症例77歳，女性。主訴，右下腹部痛。注腸造影にて回盲部癌，上行結腸ポリープ，腹部 Echo にて胆嚢結石の診断，手術目的に平成1年1月20日入院。術前胃内視鏡にて前庭部後壁にⅡc胃癌。2月14日右半結腸切除術，胆嚢摘出術施行。術中摘出胆嚢粘膜に肉眼的に胆嚢癌を認め，拡大胆摘術を施行した。比較的稀な消化器同時性三重複癌の1例と考え，若干の文献的考察を加え報告した。

60. 胆管閉塞を伴った後腹膜線維症の1例

舟波　裕，菊池俊之，徳元伸行
久賀克也　（鹿島労災）

症例は74歳，男性。86年1月20日後腹膜繊維症にて泌尿器科で手術。86年2月18日肝門部胆管狭窄による黄疸のため PTCD 挿入。胆道鏡下生検および臨床経過より後腹膜繊維症による胆管狭窄と診断。86年9月25日 PTCD 内瘻化するも88年8月6日発熱腹痛出現。内瘻化チューブに起因する総胆管結石と診断。88年8月24日入院。9月9日総胆管切開截石術施行。術後チューブ造影にて胆管狭窄は消失していた。

61. 15歳胃癌の1例

松原宏昌，相馬光弘，岡田　正
今園　修，室谷典義（県立佐原）

症例15歳，女子。主訴貧血上腹部痛。1989年10月6日胃全摘施行。P0H0S2N2 stage Ⅲ，sig. se. n_2 であった。術後経過良好で現在元気に通学している。そこで1923年三木らの第1例報告以来文献的に検索しえた自験例を含む小児胃癌67例と全国胃癌登録調査報告による1977～81の胃癌67,637例を検索すると，切除率は前者61.9%，後者86.5%直死率は前者9.1%後者1.9%，また前者の治癒切除例で5生率40.0%，非治癒では2年以内にすべて死亡していた。

62. 肛門腺由来と思われる管外性肛門管癌の1例

村島正泰，村島正博（村島病院）
大島郁也　（塩谷病院）
粟野友太　（千大）

症例は61歳，男性。肛門部鈍痛を主訴として来院。肛門外側4時から6時の皮膚に発赤，腫張，硬結あり，6時の Anal crypt と交通を認めたため坐骨直腸窩膿瘍の診断にて入院。根治術を行なったが原発口は難治性でムチン様分泌があり，生検で粘液癌と判明したため腹会陰式直腸切断術を施行した。病理標本から肛門腺の証明は困難であったが，臨床的に肛門腺と交通がある粘膜下（管外性）腫瘍であることから肛門腺由来肛門管癌と考えられた。

63. 胃外型発育をきたした胃平滑筋腫の1例

勝木茂美，深町信一，小林　肇
（深町病院）
岡住慎一　（千大）

胃平滑筋腫はそれほど稀な疾患ではないが，われわれ